

## 卒業生寄稿

じんかん  
「人間万事 塞翁が馬 ～事あるが人生・事あるを生  
かせ～」を教訓とした我が半生をかえりみて

横 島 彰

取手市立取手第一中学校 校長

## 1 はじめに

平成最後の年度、平成31（2019）年3月31日をもって、教育公務員を定年する。思えば多くの子供たちと出会い、様々な人の支えをいただき、多少の失敗と波乱はあったが、全体的に恵まれた半生であったと思う。その半生における様々な思いを雑感（まとまりのない感想）として綴ってみる。

## 2 自己紹介

私の出身は福島県いわき市である。公立小・中・高を卒業後、北里大学衛生学部化学科に入学したのが昭和53（1978）年4月である。化学を志したのは、化学分野が好きだったこと、中学校・高校時代の恩師が化学専門で憧れたこと、そして化学を通して他の人の役に立ちたいと考えたことに他ならない。大学では、体育会自動車部に所属し勉学よりも部活や友人との関わりを大切に学生であったように思う。また、教員免許を取得したのは、絶対教員になりたいとの考えよりも、資格をもっていた方が後の人生に有利だろうとの思いから取得したものである。（これが後の人生を切り開いてくれるとは夢にも思わずに・・・）

この大学生活から多くを学ぶことができた。化学の基礎知識や奥深さ、人との関わり方や付き合い方についてである。特に、3年生のとき主将となった自動車部では、組織運営について様々な体験をした。当時の自動車部は、北里祭において車によるナイトラリー（相模原校舎をスタートし、富士山周辺を走り相模原校舎に戻ってくるコース）を開催し収益を部費に当てていた。200kmを超えるコースづくり、スポンサーへの協力依頼・要請・お礼の仕方、参加者に対する責任、学校外の方々やOBの方々との関わり方等を勉強した貴重な4年間であった。

大学4年生の卒業研究は、工業化学教室に所属し、そこから派遣され東京大学生産技術研究所で研究させていただいた。卒論のテーマは「携帯型人工腎臓用小型限外濾過器の開発とその性能評価、及びマイクロカプセル型吸着剤の試作とその性能評価」というもので

あった。研究機関の周りはバブル前とはいえ、六本木があり華やかな環境であったが、生産技術研究所は別天地のように地道に研究に没頭する研究者の集団で、自分の使命や課題解決に向けて一所懸命努力することの素晴らしさを教えられた一年であった。研究中はいろいろな体験をした。研究に必要な血液（豚の血）を屠畜場にもらいに行ったときの屠畜場の雰囲気や度肝を抜かれ、もらった血を5ℓのポリタンクに入れ持ち帰るときの温かさ、食事をするときの「いただきます」の本当の意味（生物の命をいただくこと）や、学校とは別な社会の一面を垣間見た。そんな中、6月に教員免許を取得するために2週間出身高校で教育実習をさせていただいた。今思うと、甘えと適当さが漂う実習態度で恥ずかしい限りであった。その後は、卒論完成と民間会社への就職を考え、活動する日々であった。そんな中、帝国臓器製薬株式会社から内定をもらいホルモン抽出関係研究職として地元で働けるようになった。

### 3 挫折

卒論が完成し卒業が間近に近づいた頃、思いもよらないことが起きた。卒業の延期である。ある教科の単位が取れなかったのだ。その時の落胆、今後どうすればいいか、頭が真っ白になってトボトボと下宿に帰宅したことを今でも悪夢としてうなされる時がある。就職先への迷惑、両親への申し訳なさ、多くの人たちの期待を裏切ってしまいしばらくは挫折感にさいなまれた。私の人生が変わった瞬間であった。しかし、その責任は自分で取るしはなく、解決策も自分で考え取り組むしかなく、立ち止まっても何の進展もない。時あたかも就職は、新卒絶対の時代であった。「7月に卒業するか?」、「1年後に卒業するか?」を真剣に考え、悩みに続けた。その時、相談にのってくれた家族や先生方、慰めてくれた友人には今でも感謝している。悩んでいても時は戻らない。自分なりに努力し試験に臨んだ結果だが、失敗したのである。その事実を真摯に受け止め、二度と失敗はしないように考えようと決めた。自分の出した答えは、まず卒業することを第一に考えようと決意した。そのための方法として、大学4年生の卒業研究でお世話になった工業化学教室に研究生として在籍させていただき、単位取得のために勉強を繰り返すことにした。何とかなるだろうとの甘い考えは捨て、卒業することを第一に考え、研究室内で後輩と共に学び合った。教えることは理解していないとできないことや、自分の力を限らない（やればできる）ことの大切さを学ぶことができた。

### 4 卒業は7月31日。しかし・・・

研究生としての学習と同時に、7月に卒業できた場合を考えて就職活動も同時に進めた。その結果、富山化学工業株式会社から9月1日採用との内定通知を受け取った。

後は卒業するだけである。追試験の日、以前よりは自信をもって追試験を受験した。M教授の温情もあってか合格することができた。衛生学部の掲示板の合格者の欄に、自分の

学籍番号を見付け、卒業できると思ったときの喜びは何ともいえないものであった。研究室への報告、皆さんにお礼を述べ、早めの帰宅。両親へ卒業できたとの電話をするべく50ccバイクで公衆電話へ向かった。後から考えるとうれしさのあまり、急いだ運転をしていたのかもしれない。

その時に再度の失敗、交通事故に遭ってしまった。バイクと車の接触事故であった。命に別状はなかったが、頭部打撲と左足下腿を骨折し救急車で病院へ搬送された。後から現場を確認したところ、よく命が助かったと思う状況であった。そんな中、命を失わず生き残れたのは何故かを考えたとき、天命や宿命を感じた。人としてこの世に生まれてきた限り、何か使命をもって生まれてきたと考えるようになった。人のためになることを少しずつ続けようとするきっかけとなった出来事でもあった。約2か月間の入院となり、卒業証書は母が学部長室で受け取った。そしてまた就職できなくなった。またも両親を始め多くの人に心配をかける結果となってしまった。「なぜ自分だけこのような目に遭うのか?」悩んだ時期もあったが、両親から「命があっただけ儲けもの、人生先は長いからくさらず頑張れ」との言葉に助けられ、また頑張る気持ちになった。人生、何をやってもうまいかない時期もあるなど実感すると共に、あせらずに、その時の状況を見据えて、着実に過ごすことが人生では大切だと教訓を得た。

そして、健康のありがたさである。「普通に生活できる素晴らしさ」「成功や失敗、悩みながらも活動できる喜び」等を認識する機会でもあった。退院後、しばらく実家で静養し、晩秋に大学に戻り、研究生として学び就職活動もさせていただいた。研究室の先生方の親身なご指導、アドバイスを受け、就職の時期は逸したとはいえ、W教授の紹介で大塚ゴム化学工業株式会社の試験を受けさせていただき、内定を得た。4月から就職する運びとなった。

## 5 民間会社に就職して

大塚ゴム化学工業株式会社は本田技研工業株式会社の傘下で、車の部品を製造している会社である。ここでは、製造開発に携わり、設計や部品の試作、金型製造の打ち合わせ等充実した日々を送った。同窓生もあり、楽しく充実した職場であった。しかし、人のために何かしたい、そして教員免許を生かしたいとの思いが捨てきれず、福島県教員採用試験を受験した。仕事の合間の受験なので不合格。しかし、その年度末、高校時代の恩師K先生より高校の講師にならないかとのお誘いを受けた。教員以外の仕事をしとの受験に限界を感じていた私は、いろいろ悩んだがせっかくのチャンスに挑戦してみようと考え、大塚ゴム化学工業株式会社を退社した。夢にチャレンジするためにと、快く送り出してくれた大塚ゴム化学工業株式会社の社員の皆様には、心より感謝している。

大塚ゴム化学工業株式会社では、|仕事に必要な事は学び続けることが必要であること。仕事におけるコミュニケーションの大切さ。チームで共同する素晴らしさ。職務を全うする責任感の大切さ。仕事の厳しさ。上司の段取りの良さと仕事ぶりのたくましさ。時代に

マッチした新しい発想の大切さ。お客様を第一に考えること。できないではなくできる方法を探すこと。やらないとチャンスを逃すこと等」を学ぶことができた。この経験が、教員時代にも生きている。

## 6 教員としてのスタートは、出身高校で

4月より福島県立U高等学校で化学と生物の常勤講師として勤務した。

初めて教員として生徒の前に立って教えることになったので、大変緊張したことを覚えている。教科書をなぞり、教えることが精一杯の授業であったが、教えることの楽しさや素晴らしさと同時に難しさ厳しさも理解することができた。一例を上げると、ある男子生徒がいた。口数が少なく、怠学傾向のある生徒であった。テストは赤点が多く、再テストをしても合格点が取れなかったため、私の担当している化学で単位未認定をした。他の教科も未認定があったため、その生徒が留年になった。そして、学校を退学していった。後で知ったことだが、そのとき彼の家庭は経済的に火の車になっており、学校に登校するだけでも大変な状況であることを知った。なぜ、もっと早くその情報を共有できなかったのか、もう少し親身に面倒をみればよかったと大いに反省した。自分が体験したことと同じような思いをさせた後悔と、教師としての未熟さを実感した。U高校での講師は一年で終了した。

## 7 中学校講師として

次の教員の口を探していると、茨城県取手市のD中学校より半年間の理科の非常勤講師の話をいただいた。理科担当教員が、内地留学（教員が大学等へ出張し、指導技術等を学ぶもの）をするための後補充であった。地元を離れるので少し悩んだが、教員採用試験の受験対策だけをしているより、多くの経験ができる講師がよいと考え、チャレンジすることにした。

D中学校は、現在勤務している学校で、「喜んで事に当りましょう」を校訓とする学校である。教師が元気で働きやすく、生徒も落ち着いた中学校らしいまとまりのある学校であった。半年間勤務したことで、今の私があるといっても過言ではない。それは、様々なタイプの先生方と出会ったことである。市の中心校であるため、指導力のある個性あふれる先生方と出会い、中等教育のやりがいと、生徒を教えるコツ（生徒との関わりを大切にすること、相手に要求するならその分教師も手本を示すこと等）を学ぶことができた。

また、高校と中学校との違いを知る機会にもなった。どちらかという高校は入学試験があるためにほぼ均一の学力と経済力の生徒で構成されており、少なからず自我をもっている集団である。ところが中学校は、生徒自身の経験が乏しく、自我を構築中であること。様々な可能性をもっている生徒もいるが、家庭の状況を背負う生徒が公立校には多いこと、成長の差が大きい集団であることを認識できた。



そして半年間の勤務を終え、次のE中学校へ赴任することになった。同じ市内の中学校なので大丈夫だろうと高を括っていたが、大きな衝撃を受けることとなった。校内暴力・非行が横行していた時代。その時代を正に象徴するような学校であった。ひと学年12クラスの大規模校でもあり、療養休暇の教員のかわりとして初めて担任をもつことにもなった。

クラスは、雑然としていて、やんちゃなグループに所属する生徒もおり、怠学・さぼり・たばこ・シンナー・他校とのトラブル等、日常茶飯事であった。そのグループの生徒たちは、給食の時間になると登校してくる。鍵を壊し給食室に勝手に入り込み、給食を食べ散らかす。下の階の生徒や教員につばを吐きかける。廊下を我が物顔で闊歩し、器物を壊し、教師を挑発するような生徒もいた。

教員は、このグループを何とかしようと指導したり、校舎や校外を巡回したり、保護者との面談を繰り返したりと関わり続けた。しかし、一度荒れるとなかなか収まりは付かず、徒労に終わる日々であった。「学校は3日あれば荒れる。立て直すには早くても3年かかる」との言葉もあるが、正に一朝一夕に解決できない現状であった。教員たちは、この状況から、疲弊しきっている状態でもあった。学校は、勉強を教える所と認識していた私は大きなショックを受けた。人に迷惑をかけないという前提・正論が通じないのである。

教師という仕事の大変さ、様々な事態に対応することのできる判断力・適応力、生徒・保護者を納得させる説得力、教師が必要とするスキルの多さを痛切に感じた半年であった。そして、指導法を全職員が共通理解し、同じベクトルで組織として指導しないと効果は半減すると教えられた学校でもあった。

それでも私が教師をあきらめなかったのは、人のためになると考えたこと、生徒の人生を左右する力が教師にはあると思ったからである。

## 8 中学校教諭として

この年、試験日の違う教員採用試験（福島県・新潟県・茨城県の3県）を受験し、茨城県の中学校で合格採用になった。赴任校は、幸か不幸かそのままE中学校であった。この後、9年間のE中学校勤務になる。その時の校長は、疲弊し関わりを避けている職員の一掃を図った。17人の職員が異動し、11人が新規採用（以下新採）という人事であった。校長の裁量で、学校が変わることを実感する出来事であった。（現在は教育委員会主導の人事となった）

これまでのE中学校の勤務経験を生かし、3年生の担任として勤務した。新採となって勤務してみると、教員の職能の多さに驚いた。クラス経営・生徒指導・教科指導・特別活動・道徳の時間・部活動・保護者対応・出張等一日があっという間に過ぎてしまう。現在の新採と違い、研修の期間も少なく、余裕もなく、先輩の指導法を見よう見まねでまねしながら、「習うより慣れろ」をモットーに、自分のスキルを向上させていくのが関の山であった。また、講師のときの担任と違い、一からクラスをつくりあげるのでやりがいと責任の

重さを実感した。根拠のない自信をもち、若さだけで日々奮闘し続けた時代であった。

さらに部活動も主顧問であった。私自身はサッカー部・野球部・科学部・自動車部に所属した経験はあるが、まったく経験のない柔道部顧問を校務分掌で与えられた。E中学校在籍期間は、柔道部顧問として過ごすことになる。9年間の部活動運営で様々な体験をした。素人顧問なので、本を読みあさり指導法を学ぶと共に、夜間に柔道教室に通い初段も取得した。しかし、生徒たちは私の指示に御座りな態度で対応するのが実状であった。何とかしなければならぬと感じた私は、近くの中学校の柔道専門の顧問に教えを請い、土日を中心に合同練習しながら運営方法を学んだ。そのうち、生徒たちの私を見る目が変わり、真剣に活動するようになってきた。このことから、本気になって子供たちと関わることの大切さと、あきらめずに指導し続けることの大切さに気がついた。部活動は子供たちの成長に欠くことのできない大きな教育の一つであるとも感じた。（しかし、現在は部活動改革などで効率的な部活動を模索する時代になってきている）そんな中、三年目を過ぎると、部活動も軌道に乗り、市郡大会を勝ち上がり県南大会そして県大会にコマを進めることができるようになってきた。

そんな中、大きな事故が起こった。生徒の死である。団体戦の主力であった生徒が亡くなったのである。県南大会を終え、県大会に出場する2週間前、部活の休養日に、生徒自ら申し込んだ地域の柔道連盟主催の大会に父親と個人的に参加した。その試合中、心不全で亡くなったのである。安全確保と生徒の休養のために、練習を休みにしていた私には寝耳に水で驚愕した。ご自宅に搬送されたご遺体に対面したとき、正に寝ているような状態で「どうした、起きろよ」と無意識に声をかけたのが昨日のように思い出される。部活代表者の弔辞作成・お通夜・葬儀等あっという間に時は過ぎ、寂しさとつらさと、彼の笑顔が交互に思い出され、しばらく放心状態が続いた。ご両親の心中を察するに、行き場のない怒りに戸惑われていたと思う。何と声をかけてよいか分からないまま、様々な対応に追われ、何とかその場その場の対応をしたのが実情である。中学生のように若くても、どんなに健康に見えても突然亡くなることがあることを認識した手痛い事故であった。そして、学校事故が起きた場合、学校としてどのような対応になるか、事実や周りの心情をどのように汲み取り対応するかなどを経験した。二度と経験したくない出来事であった。さらに、「人の命には限りがあること」を思い知った。命とは時間であり、その時その時を大切に、冷静に判断し、一期一会の気持ちで生きなければならぬと強く思うようになった。それを貫くことが彼の供養になると感じた。

E中学校以外にも、F中学校・G中学校で教諭として勤務し多くの経験をした。しかし、常にその根底にあるものは、「学校はかけがえのない子供の命を預かる場所である」ということだ。「安全・安心な学校」「相手を尊重し、もてる力を伸ばすことが最も重要である」ということを実感することになった。これらのことは、その後の私の人生の大きな指針にもなった。

## 9 小学校教諭として

茨城県小中学校採用の教員は、小学校中学校両方の免許を3年以内に取得することを合格後の条件としている。今でもこの条件は変わらず、研修への推薦・昇進等に影響を与えるところもある。教育学部卒業以外の教師は、だいたいが中学校と高校の免許のみで、通信教育で小学校免許を取得することとなる。私は、3年目に何とか取得することができた。そのころは、あまり小学校教員への興味・関心がなく、昇進などへの思いも薄かったため、生涯中学校で勤務できればそれでいいと考えていた。しかし、E中での勤務が長くなりO小学校の異動を命じられた。その小学校には4年間勤務し、2年間高学年（5年生・6年生）の担任として、2年間は教務主任として勤務した。この2年間で小学校で担当した最初で最後の担任であった。中学校3年生を卒業させてすぐの小学校勤務だったので、初めて5年生の担任として教室に入ったとき戸惑いを思い出す。まず、教室が中学校より狭く、40人学級であったこと。次に目線の高さが違うのである。どちらかといえば大柄な私は、小学生に対すると中学生より目線を下に向けるようになる。何度も、体の小さい児童とぶつかったこともあった。さらに、児童の会話する声が高いのである。キンキン声で非常に賑やかに聞こえる。そして、中学校で通じた言葉が通じない。難しい言葉は理解できないのである。小学生は高学年といえども、丁寧に分かりやすく説明する必要がある、細かい合理的配慮をしなければならないと学ぶことができた。その上、このクラスは、私の赴任前学級崩壊をしたクラスで、教員を信じない児童が多かったのである。対応策として私は、まず一緒に遊ぶことからスタートした。行間休み時間(2校時と3校時の間に20分の休み時間)、昼休み(40分)、ドッジボールを中心に児童と遊ぶことにした。また、清掃・給食指導は師弟同行で児童と一緒に掃除や給食準備をし、給食班で一緒に食事と会話をするを心掛けた。そして、発生したトラブルは学級活動を通して、小さなトラブルでも隠さずに全児童で話し合い、相手の思いや考えを確認させ、自らの考えと違う考えもあることを分かってもらうまで説明した。同時に社会でよりよく生きるための社会通念も伝え続けるようにした。

その上全教科を教えるのも大変であった。文科系の教科はいうに及ばず、音楽・家庭なども教えることとなる。特に音楽は、私自身が不得手であった。自らピアノを練習したり、CDを通して教えるようにして、元気よく歌い、音を楽しめる児童にすることだけを目標に指導した。そんな中、このクラスが6年生に進級した秋(単学級で同じ児童を持ち上がった)に学校を代表して市民会館においてクラス全員で合唱発表をすることになった。本来は音楽主任が指導指揮をして参加するのが通例だが、音楽主任が学級崩壊時の担任であることを考慮し、私自身が指導し、指揮をすることで参加してほしいとの職務命令であった。とにかく、児童を信じ一所懸命取り組んだことを思い出す。おかげさまで合唱発表では好評を得ることができた。この児童40人は、2年間担任し、無事に卒業させることができた。この2年間で私も中学校教員だけでは理解できないことを学び、教員としての幅が広がったと思う。それは、小学校高学年とはいえ、一個の人格をもっていること、丁寧に分かる

授業が大切であること、毎日教室で2年間一緒に過ごすと、児童の考え方も担任に似てく  
ること、児童に寄り添い児童を中心に据えた学級経営が全てに通じることを学んだ期間で  
あった。

## 10 教務主任としての8年間

小学校2年間・中学校6年間、3校で教務主任として勤務した。管理職の指導を受けながら、  
教育目標の具現化のために教育課程を立案するのが教務主任である。責任の重さと職種の  
違いに戸惑いながらも、大いに勉強することができた8年間だった。

特に学力向上は、教務主任の腕の見せどころである。研究主任と協同で、分かる授業の  
実践のために力を注いだ。よりよい指導法確立のためは、全教科の指導に精通しなければ  
ならず、全教科領域の指導要領を読み込むところからスタートした。そして、勤務校の実  
態把握が欠かせない。何が達成できていて、何が不足しているかを把握し、集中して指導  
するようにした。研修の中心教科を決め、身につけさせたい力を育成するのである。勤務  
校で共通して不足していたのは、表現力、コミュニケーション能力である（現在も課題で  
ある学校が多い）。その解決のためには、児童が自分の考えをもつこと、そしてグループ  
で考え表現し合い、自らの考えを深めることが必要である。その研修のために、市内の小  
中学校の教務主任と研究会を組織したり、色々な研修会に自費で参加するなど、コミュニ  
ケーション能力の育成のための指導はどうあるべきか等を学び、協議した。さらに、論文  
にも挑戦した。研究主題「自ら課題を明確にし、主体的に課題解決に取り組む理科教育の  
在り方」というテーマで、教育研究会の論文に応募した。論文を書くことは、自分の考え  
をまとめ深めるよい機会であると実感した。卒論も含め、ぜひ挑戦してほしいと思う。

さらに、教務主任の仕事は行事の企画・運営、教員の意見の集約、そして管理職への意  
見具申、保護者対応や学校内外の環境整備（草刈り・花壇づくり等）、無償教科書配布に  
かかる教科書事務など大忙しの時代であった。忙しいときでも、周りの教職員の思いに寄  
り添い、意見の調整をしながら組織で対応することの重要性を学んだ時期でもあった。

## 11 教頭としての8年間

小学校4年間、中学校4年間、3校で勤務した。教頭職は、教諭と仕事内容が全く違う。  
教頭は填補等の授業に出ることもあるが、ほとんどが報告書等の事務処理、金銭管理、服  
務管理、行事等対外的な調整、内外の環境整備（除草、施設修理）、教職員の相談、教員  
評価等、教育を実践するにあたっての下地を支える役職である。そして、生徒指導では生  
徒指導主事と共に様々な情報を集約して解決にあたる場合が多い。感情のもつれから、問  
題が長引く場合もある。そのような保護者・地域からのクレーム対応も重要な仕事である。  
モンスターペアレンツという言葉もあるが、本当に無理難題を訴え続ける方もいる。子供  
をよくしたいという思いは共通しているが、子離れできずに自分の思い通りにしたい保護



者、逆に子供の言いなりで指導できない保護者、方向性がずれている保護者など様々である。その対策としては、とにかく話をよく聴くこと、そして相手に寄り添いながら、主訴を整理し、一つ一つ建設的な意見として返すことが大切である。一度電話や面談があると2時間～3時間は費やす覚悟が必要である。しかし、こじれるとなかなか埒が明かない。粘り強く、丁寧に対応することが必要である。校長の判断指示を受け、関係諸機関との連携を図りながら、法に照らし対応することになる。よって教育基本法等の法を理解しておくことが重要である。そして、事故報告書の作成もある。これは、教育委員会への報告書で、最終的に県教育委員会まで報告されるものである。誰が読んでも分かるように時系列で記入する。私が教頭時代作成した事故報告書（児童生徒の交通事故、いじめ、自殺未遂、問題行動、教師のコンプライアンス違反等）は数十通に及んだ。教師関係のものは、懲戒処分に直結するため正確に、事実を元にその教師を支えるように書くことに心掛けた。

教頭は、教諭時代の様々な経験を生かすことのできる立場であると同時に、管理者として、自分を犠牲にしながら取り組むことの多い職種である。そして学校経営では校長の経営理念を具現化するために、職員室の担任として奮闘する立場でもある。ときには、校長と教職員の間に入って考えを調整したり、職員の勤務姿勢・服務規律も指導しなければならない。教頭職は人間性が最も大きく問われる立場であるとも感じた。優しさの中に、厳しさをもち、明るく柔軟に教職員を包む度量が求められる職種でもある。私が、常々心掛けたのは、教職員間の信頼である。「会話と笑いの中に戦略が生まれる」を合い言葉に、教職員に寄り添い、働きやすい職員室づくりを目指した。これらが、児童生徒の自己実現の素地をつくる教育のために不可欠であると信じながら頑張った8年間であった。

## 12 校長としての4年間

小学校2年、中学校2年、2校で校長として勤務している。校長になれば少しは余裕が生まれるだろうと考えていたが、大きな間違いであった。責任の重さが違うのである。確かに仕事量は教頭・教務主任が多い。しかし、最終的に判断指示をする校長は大きな責任が伴う。そして、校長の発言は学校を代表しての発言となる。慎重に話す必要もある。そのことを考えると校長として初めて赴任したころは緊張感からなかなか眠れない日々が続いた。しかし、校長自らが不安に思っていたのでは、学校自体はまとまらない。任された学校が、児童生徒にとって、保護者や教職員にとって、地域にとって、安全・安心であり、子供たちのもっている能力を少しずつ、着実に伸ばすために、全力で勤務することを心に誓い勤務するようになった。

この4年間の学校経営の一端を示す。国や県や市の指導方針を受け、「教育は信頼の上に成り立つ」という意識を教職員にまず浸透させた。そして、先行き不透明な時代を生き抜くための素地を育成するようにした。テストの点数を上げることを目的にするのではなく、子供のもてる力を最大限に発揮できる活動を目指した。各教科・領域の授業の充実

はもとより、行事・効率的な部活動の運営、さらにはB小学校・D中学校に学ぶことの素晴らしさを意識させることに努めた。この中心となっている言葉は、「チー夢和ーク」というスローガンで表現した。チー夢和ークは、(日々の夢(課題)をもち+集団生活している相手を尊重すること(和)+集団で頑張り、集団で伸びる)ことを意味した造語である。教育活動全体で、この言葉を伝え続けること、そして自分の考えをもち、コミュニケーションを通して自分の考えを深め、成長していくことを実践することから、よりよい自己実現ができる子供を育成したいと考え取り組んできた。日々試行錯誤であったが、皆さんの協力のおかげで大過なく校長としての勤務期間が終了しようとしている。教員生活も残り少なくなった現在、悔いの残らない教員生活を全うするため、一日一日を大切に、思いを込めて、子供の成長を信じ、あきらめることなく前進していきたいと考えている。いずれにしても、残された日々を全力で頑張る覚悟である。

### 13 北里大学卒業の教職員として

3年に一度ずつ開催される「北里教師の会」には都合が付くかぎり参加させていただいた。様々な先生方との情報交換をし、刺激を受けるよい機会となった。そして平成29年(2017)10月18日~20日に開催された第68回全日本中学校校長会東京大会(東京フォーラムA)では、北里大学特別荣誉教授大村智先生のご講演を拝聴する機会を得た。内容は、「その時その時が学びであり、考え続けなさい」「人のためになることをやりなさい」「失敗を恐れず、為せば成るの精神で生きなさい」「人と同じことをやっても価値がない。真似をしたらそこで終わりだ」等、会場一杯の全国中学校校長の前で、熱く語られた。大村先生の生き方を学ぶと共にノーベル生理学賞・医学賞を受賞された先生がおられる大学の卒業生としての誇らしさを感じた。ところで、大学・高等学校等の教育関係には、多くの卒業生が勤務していると思う。しかし、公立の義務教育を担う教職員には、まだまだ卒業生が少ないと感じる。茨城県では、私の知るかぎり数名の方が勤務しているに過ぎない。理科離れが叫ばれ久しいが、ぜひ専門分野を修了した皆さんが、義務教育においてもその経験を教えることで、理科好きの子供が育つと思う。本物に子供たちは憧れる。私たちは教育学部卒業の教職員とは違った視点で、子供と接することができる利点がある。ぜひ、学生の皆さんには教育公務員に挑戦してほしいと思う。

### 14 結びとして

「教育は国家百年の大計」「米百俵の精神」という言葉がある。いずれも教育の大切さを表した言葉である。三十数年間教育に携わった者として、私が体験した教育の一端を紹介させていただいた。子供が人間となるために、社会という集団でよりよく生き抜くために、日々の活動から何かを学び、成功と失敗を繰り返し、考え・挑戦し、めげずに生きる気概が人生には不可欠である。ぜひ、北里大学教職課程を選択している学生の皆さんは、就職

先の一つとして教職も候補に挙げてほしい。人生をかけて取り組む価値のある仕事の一つであると思う。ブラック企業といわれ働き方改革のやり玉に挙げられてはいるが、やりがいがあり、人のためになり、社会のためになる仕事であることは間違いない。

今後益々先行き不透明な時代になる。30年後・50年後はどのような世界になるか想像できないが、人としての営みは変わらない。持続可能な社会のためには、平和な社会の実現、人を思いやり相手をリスペクトし協同することが大切である。その素地をつくりあげるのが教育であると私は確信している。私の経験からも、世の中の全ては何が幸いして、何が禍するか分からない。正に「人間万事 塞翁が馬」である。そして、「事あるが人生、事あるを生かせ」の気持ちでチャレンジし続けることが大切である。毎日人の数だけ違う様々なことが起こっている。自分に起こった事象を真摯に受け止め、主体的に生き抜く人になるために、今できることから真剣に行うことをお勧めする。その中から、コミュニケーション能力と相手と折り合いを付ける能力をマスターすることが、よりよい教員・社会人になるための資質であると感じる。

北里大学出身の多くの方々が教職に就き、私たちの後を引き継いでくれることを願っている。学生の皆さんのご健闘をお祈りするとともに、このような機会を与えていただいた北里大学教職課程センターに感謝申し上げ結びとする。